様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１８４７８

研究課題名（和文）中世における音声・音曲の実態にせまる―読経音曲を基軸として―

研究課題名（英文）Research on the actual conditions of voice and music in the Medieval Ages; based on sutra chanting

研究代表者
柴　佳世乃（Shiba, Kayono）

千葉大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：６０２３５５６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、中世において様々に体系化がなされた〈音曲〉の実態を、仏教儀礼における音声を中心に具体的に解明し、諸芸能が音曲で連動していることを浮かび上がらせることを企図する。(1)講式の復元的研究と詠唱の実現、(2)読経音曲の復元に関する研究、(3)音曲が行われた場の解明、これらにおける研究成果を得た。
　(1)では、声明研究者および実唱者（天台僧侶）との共同作業により、講式の復元実唱を行った。澄憲作『如意輪講式』をことばと音曲の両面から検討し、現代に甦らせた。(2)では、読経音曲の分析にかかり、古譜と照合しながら曲節の基礎的解明を行った。(3)では、書写山や都など音曲の生成する場について論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　澄憲とその周辺における講式作成の現場を立体的に把握することに成功した。復元作業の過程で、ことばと音曲とがどのように結びついているのか、どのように構想・作成されたのかが、資料と実唱に基づいて具体的に把捉された。本研究で培われた新しい「方法」が、難解な復元実唱への道を確実に拓いた。数少ない澄憲作の講式とその周辺資料の発見が為されたことの意義も大きい。
　研究成果は、学術論文や研究発表などの他、一般向け講座を行って広く公表に務めた。何より、平泉中尊寺にて「如意輪講式復元法要」が行われたことは大きな成果であった。新聞やテレビ報道を通じてダイレクトに研究成果が一般社会に届けられ、大きな反響を呼んだ。

研究成果の概要（英文）：In this study, I clarified the actual situation of <voice / sound>, which was systematized in various ways in the Middle Ages, focusing on the voice in Buddhist rituals, and clarify that various performing arts were linked.
　I focused on 3 points, 1) Restorative research of lectures and realization of ritual chanting; The restoration of the ritual ceremony "Nyoirin Koshiki" by Choken(Tendai monk) revived it in the present age. 2) Research on restoration of sutra chanting; I analyzed the sutra chanting and clarified the basic verses while collating them with the old scores. 3) Elucidation of the place where rituals were performed such as Mt. Shosha, Todaiji, and the capital.

研究分野：中世文学

キーワード：中世　仏教　儀礼　音曲　説話　読経　法華経　法会

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、仏教儀礼において広く行われた読経（法華経の読誦）が、平安末から鎌倉初期にかけて芸道化し、特有の音曲体系を持つことを資料の発掘と解析から明らかにしてきた。読経音曲がどのような場でいかに行われたかという、仏教儀礼における位相が浮かび上がってきたのである。これまで知られなかったその読経音曲とは、「四句甲乙」という骨格を持つ、曲節のある音楽的な読経であり、音曲的バリエーションも存していた。読経音曲が、これまで考えられている以上に周辺他芸能に影響を及ぼしている可能性は大きい。「四句甲乙」は楽書に言及され、音曲の要とされている事実を見出したが、未だその内容は解明されていない。読経音曲の芸態解明から、同時代の音楽にも新たな光を当てることができるはずである。

仏教儀礼に関しては、法会の次第や構成などについて、歴史学や仏教学、文学各方面から個別的に研究がなされてきた。例えば説経（唱導）における文学的価値は早くに見出され、安居院流唱導の文章が研究の俎上に置かれると同時に、その文化史的意義が研究されてきた。ただし、法会の重要な側面を担う〈音曲〉に関しては、体系的に捉えられることはほとんどなく、これまで考究されてこなかった。その理由には、資料の多くが各地の寺社や文庫に所蔵されて顧みられず、また分野横断的な検討が必要になるため困難だったこともあげられよう。文学・歴史学や宗教思想史研究からは、儀礼が行われる際の主体や環境に着目されるが、どのような音声が響いていたかには関心が未だ向けられていない。また、音楽研究では、声明などに特化した先行研究の厚みはあるが、仏教儀礼を総体的に捉える視点は希薄であった。

以上のような研究状況の下、文学的見地からの研究の蓄積に加え、音曲面に踏み込んで研究を展開した。〈読経音曲〉という視座をあらたに置いてみると、これを基点として、中世の音声が鮮やかに立ち上がると考えたからである。近年行ってきた声明家との共同作業から、これまでにない実唱という形での具現が手に届くところに来ていると確信し、研究に臨んだ。

2. 研究の目的

本研究は、中世において様々なかたちで体系化がなされた〈音曲〉の実態を、仏教儀礼における音声、特に読経を基点として具体的に解明し、諸芸能が音曲面で連動していることを浮かび上がらせることを企図する。

近年その存在とありようが知られるようになった読経道（芸道としての法華経読誦）は、芸能的特徴が仏教儀礼内外の諸芸能と通ずる点が多く見出せる。芸能の、とりわけ音声・音曲の古態をうかがい知るのは多くの場合たいへん難しい。しかし、これまで収集に及んだ各寺院・文庫に残る読経道資料の解析から、今日には断絶してしまった読経の復元実唱への手がかりを見出している。かつて僧俗貴顕によって行われた読経音曲は、楽書の記述にも芸態の共通点が見られ、これまで考えられている以上に広がりのあるものとの見通しを持つに至った。中世においてなされた芸能的読経―読経音曲の復元と、そこからあらためて導き出される諸芸能との連関は、中世の音声・音曲に新しい視座を提供することになるだろう。

読経音曲に着目するのはなぜか。それは、以下のような観点から、読経の解明はそれだけにとどまらない可能性を孕んでいると考えるからである。

(1) 読経音曲の核となる音曲の体系は「四句の甲乙」と称される（読経道の口伝書に具に記されている）。この「四句の甲乙」は、実は読経特有のものではなく、同時代の琵琶の口伝書に用例が見出され、音楽の要を成すものとして言及があることがわかった。これまで顧みられることのなかった「四句の甲乙」なる音曲の体系は、音楽と法会における音声との世界を地続きに捉えることになる。

(2) 説経・念仏など、仏教儀礼の他要素との連動性を具体的に辿る糸口が見出せる。従来の研究では、例えば説経の詞章（唱えられる詞）が研究の俎上にのぼることはあっても、その音曲的要素が取り上げられることはほとんどなかった。しかし、読経の音曲のありようを傍らに置くと、説経にも同様の音曲の体系化が確かに行われ、それが読経とある部分では共通し、ある部分では相違していることが如実に浮かび上がる。またこれは、仏教儀礼の多様な〈場〉の位相を考える手がかりにもなる。

(3) 読経音曲は、仏教儀礼にとどまらず、その後に発生した芸能にも影響を与えた可能性が大である。例えば、平曲（平家）の曲節は、法会で唱えられる講式の影響があるとされるが、読経音曲の芸態にも共通する要素が存する。和歌・連歌の詠歌作法にも通じている。個々の芸能の古態を探るのは容易ではないが、現在は不明ないくつかの音曲的パフォーマンス的要素について、読経音曲の解析によって解釈の可能性が確実に広がる。

読経道資料は、早くから国語学の分野で研究され、文学からも近年研究が進められたが、音曲面から取り上げられることはこれまでなかった。読経・説経を中心とした資料の解析を、声明研究者および声明家の協力を得て進め、中世の音曲の復元実唱を行う。法会にはどのような音声が響いていたのか、そしてそれは他芸能といかに地続きであったのかを、演唱という形での音曲復

元の過程を経て、具体的に明らかにするものである。そこから導き出される諸芸能との連関は、中世の音声・音曲ひいては広く文化史への新しい視座を提供することになるはずである。さらには、音声・音曲なるものの意義をあらためて現代に問いかけたい。

3. 研究の方法

本研究では、これまで中心的に取り上げられることのなかった音曲面に着目して、仏教儀礼全体に及ぶ音曲を立体的に捉えるため、以下の 3 本の柱を立てる。

(1) 読経音曲の解明と復元
(2) 説経の音曲の解明と復元
(3) 読経音曲の歴史的変遷と他芸能への影響の解明

(1) 読経音曲を、博士譜の解析をもとに声明家の協力を得て、実唱を伴って復元することを柱に据える。読経道の口伝書やわずかに残る博士譜を解読することによって、音曲の概要を明らかにする。資料の中から芸態に関する記述を抽出し、詳細に読み解くことに加え、読経音曲の譜を集積し分析する。研究協力者として、声明研究の専門家の近藤静乃氏（東京芸術大学非常勤講師）、声明家の海老原廣伸氏（天台宗泉養寺住職）、室生述成氏（天台宗東榮寺住職）に参画してもらう。協力者諸氏とは、これまでの研究において緊密な連携体勢を築いてきた。音楽の専門知識を提供してもらい、作業の過程で音曲の特質や芸態の具体相をあぶり出す。
(2) 法会において読経とセットで行われた説経（唱導）の音曲を明らかにする。従来、読経音曲と同様、ほとんど顧みられることはなかったが、解明の手がかりとなる資料が存する。『声塵要抄』、称名寺蔵金沢文庫保管『式事』『作法儀』『法則集』などがそれである。これらを用い、読経音曲の解明作業と同様に、法会でどのような音声が発せられていたのかの具体相を明らかにする。また、これまでの研究で、講式（仏菩薩などの徳を讃歎した式文を唱える仏教儀礼）の音曲が読経音曲に関わることが判明した。その古態を探るため、平安末期に天台僧 澄憲（当時最も著名な唱導家）が作成した『如意輪講式』を復曲実演する作業を共同で行う。さらに、上記の復元作業から浮かび上がってくる説経の音曲体系と特徴を、読経音曲と比較検討する。復元実唱は、(1)の作業と同様に研究協力者と協働して行う。
(3) 読経道が行われた〈場〉として重要なのは、平安末期から鎌倉中期にかけての都と、鎌倉末期から南北朝にかけての書写山（現兵庫県姫路市の書写山圓教寺）である。読経音曲は、都において王権が関わることで芸道化に拍車がかかり、後に書写山にていっそう盛んに行われた。書写山には、現在、読経音曲に関わる資料が複数伝わっている。それらの解析をもとに、書写山の読経音曲を復元する。この作業と成果は、読経の歴史的変遷を明らかにすることにつながる。同時に、その芸態の解明は、読経音曲が平曲や能、現在の東大寺お水取りの声明（読経音曲）などに影響していることを浮かび上がらせるだろう。

近年発掘された資料群を踏まえ、また新たに一次資料の調査を丹念に行い、それらを解析することによって、生きた音声として現代に甦らせることが本研究の一つの眼目である。近時行ってきた講式の古態復元作業において、文学的見地からの読解に声明研究・声明家の見解を重ね合わせて資料を解析していく方法を一層拡充させて研究を行う。

4. 研究成果

中世における仏事儀礼の実態を一次資料に基づき復元すべく、上記の通りいくつかの柱を立てて研究を進めた。研究成果の内容をまとめると、以下の通りである。

(1) 講式の復元および詠唱の実現
(2) 読経音曲の復元作業の推進
(3) 仏教儀礼の音曲が行われた場の解明

この間の具体的な成果（既公表）は、論文公刊、研究発表、法要勤行・講座などを合わせ 13 件である。タイトルを一覧にして通し番号を付す。

〔図書（共著）〕 計 1 件
①「澄憲と『如意輪講式』―その資料的価値への展望―」
〔雑誌論文〕 計 6 件
②「醍醐寺蔵貞慶作三段式『如意輪講式』解題と翻刻」
③「澄憲から貞慶へ―『如意輪講式』をめぐって―」
④「澄憲と講式―『如意輪講式』を起点として―」
⑤「〈西行〉と読経の声」
⑥「圓教寺蔵『随心如意輪経』（『随心如意宝珠転輪秘密観自在菩薩根本陀羅尼経』）翻刻と解題―澄憲『如意輪講式』と書写山―」
⑦「澄憲の講式作成の具体相―『如意輪講式』における経文引用―」
〔研究発表〕 計 2 件
⑧「澄憲と講式―『如意輪講式』を起点として」（仏教文学会 平成 30 年度４月例会「シンポジウム・講式研究のセカンドステージへ」パネラー）
⑨「〈西行〉と読経の声」（西行学会 第十回大会）

〔プロジェクト�法要㈯、一般向け講座〕 計 4 件
⑩如意輪講式　七段全修法要（於 中尊寺、2018 年 9 月 30 日）＊パンフレットも執筆「澄憲作七段式『如意輪講式』について―その資料的価値と復元実唱の意義―」
⑪～⑬「仏教儀礼の音声の世界―日本の声を聴く―」全 3 回

上記の成果内容(1）～(3）に沿って、これらの研究成果に触れつつ述べる。

まず**(1）講式の復元および詠唱の実現**では、声明研究者および声明実唱者（天台宗僧侶）との共同作業を通じて、講式の復元実唱を実現させた。平安末期の澄憲の手に成る『如意輪講式』を、ことばと音曲の両面から検討し、古写本や口伝書を読み解きつつ、現代に甦らせたものである（プロジェクト⑩)。澄憲およびその周辺における講式作成の現場を立体的に把握することに成功した。復元作業の過程で、ことばと音曲とがどのように結びついているのか、詞章はどのように構想・作成されているのかが、資料に基づいて、あるいは実唱することによって具体的に把捉された（研究論文①、④、研究発表⑧)。

数少ない澄憲作の講式とその周辺資料の発見が為されたことの意義も大きい。澄憲のみならず、血縁関係にもある貞慶についても新知見が得られることとなった。澄憲の『如意輪講式』を貞慶が改作しており、澄憲から貞慶への直接的影響が初めて見出された点で、研究が大きく前進した（研究論文②、③)。

澄憲が講式作成に用いた経典・資料群を精査する作業を通じて、これまで知られなかった経典を見出し（研究論文⑥)、澄憲の式文作成の環境を明らかにした（研究論文⑦)。

(2）読経音曲の復元作業の推進では、(1）の研究手法を応用するかたちで推し進めた。講式は、現行の曲節を参照しながら詞章と音曲との関係を検証して作り上げていったが、読経音曲復元においてもそれが有効であるとの結論に達した（研究論文④、研究発表⑧)。すなわち、僅かに現代も行われている読経音曲の分析を開始して、古譜と照合する作業に取りかかり、「四句甲乙」「叩」の曲節の解明を行っている。具体的には、東大寺（奈良市）の修二会（通称「お水取り」）の読経音曲の解析を、東京文化財研究所に所蔵される 1960 年代から 80 年代にかけての音源を視聴しつつ精緻に行う作業を共同で行っている。

また、読経道を相対的に把握するために、読経が隆盛に及ぶ時代の〈読経の声〉への関心を、西行を焦点に論じた（研究発表⑧、研究論文⑤)。

(3）仏教儀礼の音曲が行われた場の解明では、書写山と東大寺（およびそれを繋ぐ都）という観点から研究を進めた。平安末期から鎌倉時代にかけての仏教儀礼の音曲に関わる場として、書写山圓教寺という場の重要性が浮かび上がった。書写山圓教寺に所蔵される『如意輪講式』の伝本（独自本文を有する）を見出し（研究論文①、④、研究発表⑧)、同じく所蔵される『随心如意輪経』(『随心如意宝珠転輪秘密観自在菩薩根本陀羅尼経』）を見出し紹介した（研究論文④、⑥、⑦)。古代中世の仏教典籍の伝播伝来にも関わって、重要な資料群であることを論じた。

東大寺の修二会に今もなお行われている読経音曲は、修二会の歴史と今日の芸能文化的重要性にいささか反して、芸能的来歴が明らかでないが、これを都―書写山―東大寺のつながりの中で検討している。音曲の分析から、それらの場の相互の関係が複層的に浮かび上がるはずである（継続中)。

＊

以上、復元作業の過程で、ことばと音曲とがどのように結びついているのか、どのように構想・作成されたのかが、資料と実唱に基づいて具体的に把捉された。本研究で培われた新しい「方法」、すなわち一次資料の読解をもとに、研究分野を超えた共同の解析と実践が、難解な復元実唱への道を拓くことが明瞭となった。なお、これらの成果および継続して行っている読経音曲復元を基盤として、本研究は、科研費・基盤研究（B)「仏教儀礼の音曲復元から見る中世文化の総合的研究」(2021 年度～2025 年度）に発展的に引き継がれている。

数少ない澄憲作の講式とその周辺資料の発見が為されたことの意義も大きい。本研究で見出し、解読を進めた資料は 4 本にのぼる。後白河院代に一躍し、安居院流唱導を打ち立てた澄憲が、どのような資料を用い、どのように法会の文章を練り上げていったのか、さらにその波及効果はどれほどのものであったかが、『如意輪講式』復元作業の過程で具体的に解明されたのである。

研究成果は、学術論文や研究発表などの他、一般向け講座を行って広く公表に努めた。何より、平泉中尊寺にて「如意輪講式復元法要」が行われたことは大きな成果であった。文学・音楽といった研究分野を超えて研究がなされたのみならず、宗教の現場におられる僧侶の方々と一緒に復元に挑めたのは特記される。この共同作業においてこそ復元は可能となったのであり、現代および未来に向けて儀礼の意味を深く問うことになった。新聞やテレビ報道（岩手めんこいテレビによる特別番組放映）を通じてダイレクトに研究成果が一般社会に届けられ、大きな反響を呼んだ。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 柴佳世乃	４．巻 50
２．論文標題 澄憲の講式作成の具体相―『如意輪講式』における経文引用―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 千葉大学『人文研究』	６．最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S03862097-50-T1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 柴佳世乃	４．巻 49
２．論文標題 圓教寺蔵『随心如意輪経』（『随心如意宝珠転輪秘密観自在菩薩根本陀羅尼経』）翻刻と解題 ： 澄憲『如意輪講式』と書写山	５．発行年 2020年
３．雑誌名 千葉大学『人文研究』	６．最初と最後の頁 85-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S03862097-49-T85	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 柴佳世乃	４．巻 10
２．論文標題 〈西行〉と読経の声	５．発行年 2019年
３．雑誌名 西行学	６．最初と最後の頁 103-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 柴佳世乃	４．巻 44
２．論文標題 澄憲と講式―『如意輪講式』を起点として―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 仏教文学	６．最初と最後の頁 50-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 柴佳世乃	４．巻 47号
２．論文標題 「醍醐寺蔵 貞慶作三段式『如意輪講式』解題と翻刻」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 千葉大学『人文研究』	６．最初と最後の頁 pp.105～127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S03862097-47-T105	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 柴佳世乃	４．巻 33号
２．論文標題 「澄憲から貞慶へ―『如意輪講式』をめぐって―」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 語文論叢	６．最初と最後の頁 pp.１～13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S21878285-33-P1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 柴佳世乃	４．巻 なし
２．論文標題 「澄憲作七段式『如意輪講式』について―その資料的価値と復元実唱の意義―」（、	５．発行年 2018年
３．雑誌名 中尊寺金色堂大修理五十年慶讃法要『如意輪講式』パンフレット	６．最初と最後の頁 pp.6～7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 柴佳世乃	４．巻 47
２．論文標題 醍醐寺蔵貞慶作三段式『如意輪講式』解題と翻刻	５．発行年 2018年
３．雑誌名 千葉大学『人文研究』	６．最初と最後の頁 pp.105～127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S03862097-47-T105	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 柴佳世乃
2．発表標題 「澄憲と講式―『如意輪講式』を起点として」
3．学会等名 仏教文学会
4．発表年 2018年

1．発表者名 柴佳世乃
2．発表標題 「〈西行〉と読経の声」
3．学会等名 西行学会
4．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

1．著者名 小峯 和明、目黒 将史（柴「澄憲と『如意輪講式』―その資料的価値への展望―」）	4．発行年 2017年
2．出版社 笠間書院	5．総ページ数 402（担当：pp.200～214）
3．書名 【シリーズ】日本文学の展望を拓く　5　資料学の現在	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「如意輪講式　七段全修法要」（国宝金色堂大修理五十年慶讃法要、於 中尊寺、2018年9月30日）を行った。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	青木（近藤）静乃 (Aoki Shizuno)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関